

記録：令和8年度第1回連携協議会

開催日：2026年7月15日（水）午後1時45分から午後3時45分まで

会場：県防災庁舎 5F 51号室

協議題：① 各地区に学びを広げるために

② 「ひなたのつどい」コンファレンスの体験ブースについて

1 説明に関する質疑

無し

2 協議の記録

（1）各地区に学びを広げるために

① 中部地区（1）

- ・ 「当事者からの要望がない」のではなく、募集の文言を見て「自分には敷居が高い」と感じてしまっているのではないか。「どんな方でも大丈夫」「ちょっとサポートが必要な方も歓迎」といった一言があるだけで、参加しやすくなる。
- ・ 市の冊子を見ても「合理的配慮が必要な方はお申し出ください」という冷たい表現になりがち。どうすれば相談しやすくなるか、具体的な文言を模索したい。
- ・ 大学で実施した際も、最初はみんな不安。でも、一度体験して「こんな感じか」と分かれば次も来られる。いきなり本番ではなく「お試し会」のような場が必要。
- ・ 相手（講師側）も身構えてしまうことがある。お互いに「試しにやってみる」というプロセスを経て、納得してから継続できるのが理想。
- ・ 事前にオンラインや動画で会場の雰囲気を見られる仕組みがあれば、初めての人でも安心できるのではないか。

② 中部地区（2）

- ・ 知的の方は「情報が無い、知らない」という実態があり、参加しない方が多いと考える。
- ・ 聾の方は、手話通訳や要約筆記の方など、サポートのいる方がいれば参加できるが主催者側に、手話通訳の方などを配置する予算がないことが多い。また、参加するにしても、手続きが必要なこともハードルになっている。
- ・ 主催者側にどんな方が参加しても受け入れできる体制が整っていることが必要である。当事者の方は、どんな支援体制があるのか、まず場に慣れないと行きづらい、など多くの不安を抱えて

いる。当事者にとって、告知の段階から支援の情報や、申し込み後にも相談できる体制があるなど、安心してもらうための配慮が必要である。

③ 南部地区

- ・ 講座を実施する場合、HP、広報誌で情報発信している。一般の方の申込みが多い。
- ・ 児童生徒について、参加は家庭に任せている。
- ・ 自分の将来像が見えていない児童生徒が多いので、どうつなげるか。
- ・ 公民館のチラシを見せていただき、教員側も公民館講座を知った。
- ・ チラシを学校で配布するだけでも違う。
- ・ 校外学習、余暇活動等で学校の行事に入れることは可能であるが、年間計画があるのですぐに入れることが可能という訳ではない。
- ・ 在学中に講座を知る事は、将来の講座参加に繋がる。
- ・ 保護者に向けての働きかけができるとよい。チラシを配るだけでも。
- ・ 長年の課題は、送迎。
- ・ ボランティアの確保、ボランティアと参加者との信頼関係の構築も必要。
- ・ スマホ、タブレット等の機器操作も新しい体験として、学びになる。
- ・ どのような対応が必要か考え対応するが、要請が無いので、あらかじめ学んでおく必要がある。
- ・ 講座の指導者にも理解が必要。
- ・ 御池青少年自然の家では出前講座として煙体験ができる。
- ・ 昨年度の市のフラワーアレンジ講座の参加者が、習い事として自主的な学びに繋がった。さらにあと2名、参加が増えている。

④ 北部地区

- ・ 市内の特別支援学校のPT「キャリアアップセミナー」で講座を説明した。当日は講座の説明に加え、講師（当事者）による実演も実施。チラシや名刺、当事者講師のチェックリストを配布した。高等部の保護者には「卒業後の学び」として現実味を持って受け止められたが、小学部・中学部の保護者にはまだ先の話と捉えられ、関心が薄い可能性がある。
- ・ 自治会等でチラシを回覧しているが、本人（障害のある方）の目に留まって終わっているケースが多い。親や保護者の元まで情報が届き、参加を後押しする流れができていない。

- ・ 「誰でも参加 OK」と書かれていても、当事者や保護者は「自分（の子）は対象外ではないか」と無意識にシャットアウトしてしまう傾向がある。
- ・ 行政側は「全市民対象」としているが、当事者側は「健常者向けの講座」と認識し、意思疎通のズレが生じている。
- ・ 単なるチラシ配布ではなく、PTA の場に出席するなど、直接「あなたたちも参加していいんですよ」と伝えるプロセスが必要。
- ・ 一度参加した保護者が別の保護者を誘う「数珠つなぎ」の仕組みが最も効果的である。
- ・ 過去の実施例（車いすバスケ、レザークラフト、デフカフェ等）のリストを見せ、特別なことではなく「当たり前の活動」であることを視覚的に伝える

（２） 「ひなたのつどい」コンファレンスの体験ブースについて

① 中部地区（１）

■ 障がい理解の促進：

- ・ 発達障がいの方の「見え方」の体験。
- ・ 高齢者や麻痺のある方の「体の動き」を体験できる擬似体験ブース

■ 制作体験：

- ・ 前回同様、子供たちが興味をもつような制作コーナー。

■ デフカフェと交流：

- ・ 手話を使った「ジェスチャークイズ」など、簡単に参加できるものを企画。
- ・ 当事者の方と直接触れ合える体験を重視したい。

■ 集客施策：

- ・ 多くの方を巻き込むための「スタンプラリー」の実施。

② 中部地区（２）

■ デフカフェの継続

- ・ 昨年、360 度どこからでも手話が見える演出が非常に好評で宣伝効果も高かった。
- ・ 企業の理解や協力を得る場としても有効なため、継続を提案。

■ 当事者が主役（先生）になるブース：

- ・ 視覚障がいのある卒業生（マッサージ師・鍼灸師）に協力を仰ぎ、「癒やし」など、様々なテーマのブースを 3 つほど展開する。

- ・ 知的障がいのある方で、パッチワークやボールペン作りの資格を持っている方に先生になってもらうワークショップを実施。

■ ボッチャ体験：

- ・ 年齢・性別を問わず「マイルール」で楽しめる形に。
- ・ 集計やランキングを出すことで競争意識を高め、より盛り上げる。オンラインボッチャの活用も検討。

③ 南部地区

■ 継続企画

- ・ 昨年度好評だったスタンプラリーとデフカフェの継続。

■ パラスポーツ体験：

- ・ 会場の広さとの兼ね合いはあるが、ボッチャ、フライングディスクを検討。
- ・ ドラマ等の影響で関心が高い「車いすラグビー」や「車いすバスケットボール」の体験。

■ 制作物（お土産）：

- ・ レザークラフト、缶バッジ、点字体験（自分の名前を打つ）、バスボム作りなど。

④ 北部地区

■ コスモスポーツ（共生スポーツ）：

- ・ ラジコンカーなどを活用し、メッセージ性の高いスポーツ体験。
- ・ みんなでスペースを共有し、形に残るような活動。

■ 多角的な支援の提示：

- ・ 視覚的支援、行動的支援、言語的工夫など、活動の「コンセプト」そのものが来場者に伝わるような手立てを講じる。

■ アポロの泉（広場）の活用：

- ・ 2階から見下ろせる、ステージのある開放的な空間。
- ・ ステージ発表に加え、ものづくりの横でお手伝いをするような、多面的な関わりが持てる場づくり。

⑤ その他

- ・ スタンプラリーでは「共生社会シンボルマーク」をスタンプやシールとして活用すると良い。